

授業研究「看護の対象論」

～看護の対象理解のために闘病手記を読む～

山本 捷子¹⁾

木下 彩子²⁾

The Study of an Instruction Method ; Reading Memoirs written by Cancer / fatal Disease Patient and Handicapped Person to Understand the Patient's Life and Mind

Shoko YMAMOTO

Ayako KINOSHITA

要旨：「看護の対象論」の授業方法の一環として、患者の闘病における心理や生活を理解する方法として、がんや難病、障害者の手記を読むという課題学習を試みた。学生は、患者・障害者の苦闘に感動しながらも、講義で学習した障害受容過程やターミナル期の心理を理解できている。学生の興味関心があり、読みやすく、患者の心理変化ができるだけ明快に書かれた手記を選択し提示する必要があることが示唆された。

キーワード：授業研究、患者理解、障害受容過程

Summary : In the lecture of Theory of Nursing Subject, the instruction method of Reading Memoirs written by cancer / fatal disease patient and handicapped person obtained for the nursing student to understand the patients / client's life and mind, especially the theory of coping process / adaptation for fatal disease / disorders, terminology with sympathy.

key words : study of instruction method

understand patients / handicapped persons

coping process / adaptation for fatal disease / disorders

はじめに

電子メディアの発達が著しい情報化時代の現代の青年は、映像やデジタル情報には親しむが、本や新聞などの活字情報を敬遠して読まない傾向は近年殊に強くなっている。本学の学生も同様の傾向にあり、文献を読んで論理的に思考することは少ないように思われる。

そこで、基礎看護学の授業においては、臨床実習体験のない学生が看護の理解を深めるために、文献に接したり、学生が自らの体験から思考する学習方法、そのための効果的な授業方法や教材についていろいろと工夫を試みている。

本稿は、学習方法の一つとして、看護学科1年次後期の基礎看護学「看護の対象論」の授業後に、患者や家族が書いて出版されている本を提示し、客観的かつ分析的に読むという学習方法を試みた。

その課題レポートの結果をもとに、この学習方法の意義と教材活用のあり方を検討した。

I. 前提となる授業計画

1. 授業科目：1999年度基礎看護学「看護の対象論」1年後期10月～11月（15時間7回）
2. 「看護の対象論」の学習目標：「看護の対象となる人間とはどのような存在かを、特に健康との関わりから理解する。」
3. 「看護の対象論」の授業内容（項目）
 - 1) 歴史的・時間的存在としての人間
 - 2) 生物体・生活体としての人間
 - 3) 健康に関わる人間の心理と行動
 - (1) 保健行動・受療行動
 - (2) 危機・障害受容過程の心理

看護学科 1) 教授 2) 助手

(3)病者役割行動

(4)ターミナル期の心理

4. 授業方法

1) 授業内容1)は、学生自身の家族の「ファミリーサイクル」と歴史的出来事を図表化して、祖父母・父母の世代と時代の関係を理解する。

2) 内容2)はOHPを用いた講義で、薄井坦子の科学的看護論の「対象論」の部分を理解する。

3) 内容3)は、文献を抜粋した資料を用いた講義。学生は授業終了後に講義内容の理解を深めるために、がん患者・中途障害者・障害児を持つ母親、難病患者や家族などの手記を読み、課題レポートを提出する。

5. 成績評価と単位認定

課題レポートについて評価の視点を定めて評価し、出席点を加味して単位認定をする。

レポート評価の視点は、①動機・目的の明確さ。②サマライズの有無。③理論を用いた考察の有無と適切さ。④自己の向上目標の明確化。⑤論理的構成・論旨の一貫性。⑥形式や文字の読みやすさ、⑦授業の出席状況、とした。配点は③のみ10点とし各5点、レポートが提出されていれば合格とした。

本稿では、「看護の対象論」の授業終了後に、患者の手記を読み、レポートすることを「課題学習」と称し、以下にその計画、結果を述べる。

II. 課題学習の目的および方法

1. 目的

1) 「対象論」の学習を強化する。

特に健康が障害された時や、不治の病や難病をもって生きることは、生活上にどのような困難を生じ、精神的変化をもたらし、その人の生き方にどのように影響するかを理解する。

2) 一般書である手記を読むとき、単に感動するだけでなく、「手記」を学習書として対象化し、客観的に分析して読む訓練の機会とする。

2. 学習課題

1) がんや障害をもって生きる人、あるいは闘病や終末期を看取った家族が書いた手記を読む。

2) 内容を要約し、さらに印象深い部分を抜粋

し、理論と照らし合わせて、がん患者や障害者・家族の心理を考察して、レポートを作成する。

3) 感想だけでなく、看護学生としての自分の向上目標を明確にして記述する。

3. 文献の提示とレポート作成期間

教員が所蔵している手記の現物38冊と、本学図書館所蔵リスト51冊、合計89冊を提示した。その中から、あるいはそれ以外でも個人、市立図書館その他で探して、どのような手記を読んでもよいと、学生の自由選択にした。

読書並びにレポート作成期間は、1999年11月29日に課題を提示し、冬休み明けの1月14日までの1ヶ月半であった。

III. 結果と考察

1. 学習課題の達成度

全員が提示した本や、自分で学外の図書館などから探し出して、さまざまな手記に関心を持って読み、レポートを作成し期限までに提出した。

内容的には全員が、がん患者、先天的あるいは中途障害者、難病・慢性疾患患者ならびに家族の心理的葛藤・苦痛や生活上の困難さに感動しながら手記を読んでおり、学習課題は達成されている。

レポート評価の結果は、2割程度の学生が、内容をサマライズし、授業中に講義した内容や提示した資料を活用して論理的に分析している。6割の学生のレポートは、単に感想文ではなく、且つ何らかの分析を意図的に試みてはいるが、資料や理論を十分に活用してはいない。

残る1割の学生は、単なる感想文である傾向が強い。これは講義内容の理解やレポート作成の意図を十分に把握していないことが原因ではないかと考えられる。

2. 学生が選んだ手記の冊数と種類 (表1参照)

提示されたり自分で探し出して、学生83名が読んだ本の総数は60冊であった。

読まれた手記を分類すると、がん患者の闘病・看病に関する手記が最も多く33冊で、ついで多いのは障害者の手記14冊(先天障害児、交通事故や脳卒中による中途障害)であった。難病・慢性疾患の闘病記9冊(ALS、糖尿病、心臓病など)、その他4冊(痴呆老人の介護、レイプ被害者など)であった。

3. 選択した理由・動機

表1 <学生が読んだ手記>リスト

	著者名・書名・出版社	著者	数
が ん 患 者	石黒美佐子 「麻意ね、死ぬのがこわいの」立風書房	母	5
	中村光代 「ホタルの日記：わが子に伝える命の終章（エピローグ）」エフェー出版	本人	2
	千葉敦子 「よく死ぬことは、よく生きることだ」文芸春秋	本人	2
	千葉敦子 「乳ガンなんかには負けられない」	本人	1
	高橋穩世 「深紅のバラを37本」新声社	母	2
	山野井道子 「ガン病棟にきてみない？：ダメ患者の逃病記」窓社出版	本人	2
	野原一夫 「肺ガン病棟からの生還」新潮社	本人	2
	伊藤ゆきえ 「眠れぬ夜の夢」新潮出版	本人	2
	古越富美恵 「終の夏かは」読売新聞社	本人	1
	児玉隆也 「ガン病棟の九十九日」新潮出版	本人	1
	伊藤栄樹 「人は死ぬばゴミ：私のがんと闘い」新潮社	本人	1
	黒柳弥寿雄 「閑かなる死」ゆみる出版	医師	1
	吉岡昭子 「今日はすべて」新声社	本人	1
	永井忠 「もう一度海へ行きたかった」朝日新聞社	本人	1
	吉岡昭正 遺稿 「ガンと向きあった365日：死の受容」毎日新聞社	家族	1
	中島みち 「がん病棟の隣人」毎日新聞社	本人	1
	中島みち 「悔いてやまず」毎日新聞社	妻	1
	中島みち 「誰も知らないあした：ガン病棟の手記」	本人	1
	今井俊子 「病と闘う心：看護者から看護者へのメッセージ」メジカルフレンド社	本人	1
	安田つたえ 「一日生きれば：闘病十年看とりのなかで考える」	妻	1
	奥迫康子 「真利栄ちゃんママががんばってるよ：絨毛がんに冒された母と子」家の光協会	本人	1
	成田敦子 「チーちゃんごめんね：ガンと闘う母から娘へ」	本人	1
	藤島房子 「房子の日記」	本人	1
	清水光雄 「一緒に年とれずにごめんね」小学館	夫	1
	庄野ひろ子 「愛すれば告知せず」小学館	母	1
	岩田隆信 「医者が末期がん患者になってわかったこと」	本人	1
結城希伊子 「十五歳のきらめきの中で：恵美子絶唱」秋元新書	本人	1	
？ 「ママごめんね」	娘	1	
石原まき子 「愛と哀しみの日々ー妻の日記：石原裕次郎の覚悟」主婦と生活社	妻	1	
西田英史 「ではまた明日」	本人	1	
西川孝純 「がんからの生還ー告知から一年闘病レポート」朝日ソノラマ	本人	1	
細谷亮太 「川の見える病院からーがんとたたかう子どもたち」	医師	1	
向井承子 「小児病棟の子どもたち」晶文社	ジャーナリスト	1	
先天的 障害・ 中途障害	石井めぐみ 「笑ってよ、ゆっぴい」フジテレビ出版	母	6
	乙武洋匡 「五体不満足」講談社	本人	2
	小林完吾 「愛、ふたたび：辛い命を支える人たち」「愛みつけた」	父	1
	野部明子 「障害児を生むということ」中央法規	母	1
	樽井恵美子 「タフに生きたい：痛快ナースのアメリカ患者体験」	本人	2
	滝野澤直子 「でもやっぱり歩きたい：直子の車椅子奮戦記」医学書	本人	1
	星野富広 「愛、深き淵より」立風書房	本人	1
	望月春江 「生きるってすばらしいねー植物状態からの脱出」	母	3
	恋塚弘 「蘇る！失語症克服の記録」講談社	本人	1
	石黒勇二 「脳卒中実習記：医大生が倒れてから復学するまで」	本人	1
	千賀康司 「ぼくに涙はにあわない」エフェー出版	本人	1
	村松建夫 「見えない絆」ありのまま社	本人	1
柳澤桂子 「生と死が創るもの」草思社	本人	1	
大石邦子 「この命ある限り」講談社	本人	1	
難病・ 慢性 疾患	松本茂 「悪妻とのたたかい：神経難病ALSと共に」静山社	本人	2
	日本ALS協会編 「いのち燃やさん：筋萎縮性側索硬化症と闘う」静山社	共著	1
	原宏道 遺稿集 「病床からの発信」考古堂	本人	2
	鴨志田恵一 「糖尿列島」情報センター出版局	本人	1
	木暮実千代 「生きているって素晴らしい：笑いと涙の闘病記」	本人	1
	川田龍平 「龍平の現在（いま）」三省堂	本人	1
	木藤亜也 「1リットルの涙：難病と闘い続ける少女亜也の日記」	本人	2
	平澤正夫 「心臓病棟の60日」新潮社	本人	1
浦瀬さなみ 「延命病棟」径書房	その他	1	
その他	舩添要一 「母に襁褓をあてるとき」	本人	2
	門野晴子 「老親を棄てられますか」	本人	1
	ダイアナ マクゴーウィン 「私が壊れる瞬間：アルツハイマー患者の手記」	本人	1
	緑河実紗 「心を殺された私：レイプトラウマを克服して」	本人	1

どのような手記に関心を持っているかを手記の選択理由や動機から探ってみようとしたが、「課題として」が多いため、正確には把握できない。

しかし、家族に難病患者がいるという個人的な理由やボランティアの経験、テレビ放映やマスコミで話題になっている本、がん治療・病名告知やインフォームドコンセントに関心があるため、などが比較的多く見られた。

総数60冊のうち15冊は複数の学生が選んでいた。特に、石井めぐみ著「笑ってよ、ゆっぴい」は6名、石黒美佐子著「麻意ね、死ぬのがこわいの」は5名が選んでいた。この理由は、他の看護教員が授業中に紹介したり、殊に前者の著者は女優であり、闘病経過がテレビで放映されたことから学生に書名が知られていたこと、また読みやすい文体であったため、学生同士の口コミで回し読みされたようである。

4. 活用した患者理解の為の理論/モデル

特に成績Aランクの学生が、手記の中の闘病患者の心理過程を理解するために活用している理論/モデルは「フィンの危機モデル」が最も多かった。これは、がん患者となって病名告知される場面、先天障害児を生んだ母親、交通事故や脳卒中などで障害者となったとき、ほとんどの人が経験する心理的变化として、理解しやすいモデルであり、本授業に先行する成人看護学の成人臨床看護などでも紹介されているためであろう。また、キューブラ・ロスやアルフォンス・デーケンターミナル期の心理モデル、アグレアとメズイックの問題解決モデルなども散見される。

しかし、全体的には理論は適切に活用されているとは言えない。授業中に資料を提示し説明を加えたが、授業担当者としても十分に時間をかけて理解できるような授業方法であったとは思わず、この課題はやや困難か、別に授業方法の工夫や検討が必要であろうと思われる。

5. 課題学習の意義

レポートの中の感想や自己の今後の向上(努力)目標については、数量的に分類することは困難で、本学習の効果を客観的に測定することは出来ない。

しかし、ひとりひとは真剣に課題に取り組んだことが記述されており、その意義は以下の通りである。

1) 読書の機会となること

次の感想文は比較的多くの学生が記述している内容と共通しているが、課題学習の副産物として特記できる。

「与えられた課題学習であったが、興味関心を持っていたことに関する文献を真剣に読むという機会になって良かった。これまで家族の看病やボランティア経験でははっきりしなかった自分の思いを振り返る機会になった。」

すなわち、普段から関心はあっても、専門的な学習が忙しくなり、なかなか一般書を読む機会が少なくなっている看護学生に、課題が提示され、意図的に読書する機会が与えられることは、情報化時代のデジタル化された現代若者には必要な学習方法と言えるだろう。

2) 学生の学習意欲を喚起する。

個別的にはさまざまな向上目標が記述されているが、例として次のような記述が比較的多く見られた。

- ・幅広い視野を持つ。感性を磨く。心豊かな人になる。
- ・いろいろな人に出会い、相手の気持ちを理解して接すること。
- ・一人の人間として患者をみること。
- ・患者や家族のところに近づくよう努力する。
- ・コミュニケーション能力を高める。
- ・柔軟さをもって患者に対応できる看護婦になりたい。
- ・信頼される看護婦になるため、技術を向上させたい。
- ・救急の技術、看護の全般理論を理解する。
- ・ひとりひとりに対応したケアが出来る。
- ・病院が患者の生活の場であるという当たり前のことが出来る看護婦になりたい。

記述された内容は具体的ではないが、今後の看護の学習課題として、看護知識や理論、技術、コミュニケーション能力、患者や家族理解、共感的態度や感性の向上など、看護職のみならず人間性の成長につながる努力目標を挙げている。この課題学習が、学習の動機付けに役立っていることを意味していると言える。

IV. 今後への課題

学習効果の上がる授業とは、学習者の関心に合致した教材を用い、学習者の理解できるレベルで説明する教授方法であることが必要である。その

為に授業研究は、効果的な教授法を探ることであり、具体的には教授／学習目標を達成するための授業内容の精選と構成、講義技術の良否の他に、教材の適切性と適時性を把握することである。

今回の学習方法には、患者の闘病記や家族の看病の手記という主観的な文献を提示したが、どのような文献なら学生が選択しやすいか、また学習効果を上げるためには今後どのような課題があるかを探りたい。

1. 手記の精選の必要性

この学習で提示した数多くの「手記」は、がん患者、中途障害者、先天障害の子どもの母親や家族、難病・慢性疾患患者本人または家族が体験した病気や障害との出会いと苦悩、闘病していく過程でのさまざまな葛藤、生活上の困難とその克服、不幸にして亡くなった場合の「死の受容」や *Great Work* が記述されている。

その内容は危機的状況や障害受容過程、ターミナル期の患者・家族の心理的状況を現しており、その意味では学習目的の「対象の理解」には大いに役立つことは疑いない。

然るに学生は「がん」という病名のタイトルに着目して飛びついている場合もあり、必ずしも障害受容過程が鮮明に記述されていることを予め知って選択している訳ではない。

また、それらの手記には、殆んど著者が医療現場で、さまざまな苦痛や心理的衝撃から医療に対する怒りや懐疑、批判が含まれていることが多い。学生は患者や家族の批判に先導されて、客観的に読むことを阻害される場合もある。

患者・家族の主観的な生の体験記であるから、病名告知や出産時に先天障害に出会った場面の心理的衝撃、それ以後の葛藤場面や克服して再起していく状況が記述され、捉えさせたい場面が含まれていることを確認しておくことが必要であろう。

要は、学生の医学や患者心理に関する知識・理論の理解不足があることを前提に、より効果を高めるには、学生の分析能力に期待するだけでなく、読ませたい場面や内容が含まれている手記を精選して提示することが必要不可欠であるということである。

2. 「手記」を選択提示する際に考慮すべきこと

- 1) メディアやジャーナリズムで取り上げられている文献は学生の興味関心が高いので、事

前に学生の関心度を調査するのもよいだろう。また日頃から教材として適切かをチェックしておくことも大切である。

- 2) 内容が適切であっても、ハードカバーの500ページもある分厚い本は学生は敬遠する傾向がある。内容を紹介して、推薦するとよいだろう。
- 3) 出版年が古い文献は避ける必要がある。近年は「がん」でも患者本人に告知するケースも増えており、20年以上前の手記は既に該当しなくなっていると考えてよいのではないだろうか。
- 4) がん治療やインフォームド・コンセントに関しては、アメリカと日本ではまだ開きがある。その差異から、患者が受ける心理や受療行動の違いを学ばせることも可能と考えられる。その際には、推薦するとき説明を加えるとよいだろう。
- 5) 看護婦や医師本人が患者・障害者になった場合の手記の他に、医療関係者が職業上の体験見聞記として批判的に書かれた本も多い。それらはこの学習課題には直接的には該当せず、むしろ学生の思考を阻害すると考えられる。書名だけで選択すると危険であるので、内容をチェックし、除外する必要がある。

結論として、どの手記を選択するかは学生の自由裁量に任せるとしても、事前に内容をチェックして、学生の人数を考慮して適当な冊数を準備することが肝要である。

3. フォローアップ学習の工夫

今回は、時間的制約もあり、レポート提出で単位認定してしまったが、内容的には、学生個々人の豊かな学習や意見が記述されていた。また、これらの手記から、がん患者や障害者、難病患者という対象の特性を理解するだけでなく、看護・医療者の生命観・医療倫理に関する問題を考えている学生も多い。言い換えれば、医療・看護の倫理を考えさせる教材としても適切なものが多いので対象理解にとどめることなく、他の科目の教材にも活用できるということである。

しかし、患者や家族の手記の出版ということは、悪戦苦闘した闘病の末や患者の死を看取ったり、悲嘆の過程や困難を克服した後で心理的な整理がされている。そのため、生命観や死生観、障害者観を考察するにはかなりの助言や刺激が必要であ

ろう。

そこで、このような「闘病記の手記」を教材化するには、読後やレポート提出後に討議の機会をもつことによって、この学習の効果をさらに増すことができると思われる。

または、フォローアップ学習の機会として、実習終了後に体験と理論の関連性を話し合う、成人・老人・母性・小児看護学の対象理解の授業に生かす方策、あるいは3年次の「生命倫理」の授業と関連させるなどが考えられるが、これは基礎看護学だけでなく、看護学科教員が一丸となって検討する課題であろう。

おわりに

3年間の学びの中で学生は、患者／クライアントを看護の対象としながら共感的に関わることのできる看護者になるためには、自己中心的な素人である自分から、対象を客観化しながら理解していく過程を訓練する必要がある。「対象論」の授業はその一つの学習過程である。

本稿では、授業研究の一環として、看護の対象理解のために「手記」を読むという学習方法を選択し、それなりの成果を上げた。そして、学習目的以外にも、学生の看護への興味を喚起し、一般書でも教材として学習の意義があることを明らかにした。

教師である限り、効果的な授業をしなければならない。偉大な教育哲学者エドアルト・シュプラランガーは、『生まれながらの教育者の魂の中に、創造的な感激を呼び起こすという第一の問題を私は梃子の問題という。・・・教育においては、物体を動かすのではなく、魂を動かすのである』¹⁾と語っている。シュプラランガーの言う「魂を動かす為の梃子の問題」とは教育哲学であり、教育方法論につらなる思想である。この言葉から筆者等は、教育愛と情熱なしでよい教育は出来ないが、教育者にはそれ以上に『学習者の魂を動かす』ための教育の技、すなわち絶えざる授業研究が必要であることを示唆された。

今後ともこの成果を生かして、さらに効果が上がる授業を工夫していきたい。

【引用文献】

- 1) シュプラランガー著、浜田正義訳『教育者の道』改訂6版 p.26 玉川大学出版部 1973年

【参考文献】

- ・稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店
- ・宇佐美寛『大学の授業』東信堂1999年
- ・薄井坦子『科学的看護論』第3版 日本看護協会出版会 1996年
- ・滝沢武久・東洋『教授・学習の行動科学』福村出版